



夢を見た。夢だって、分かった。

真っ白な世界で、私とシキの二人だけがいた。

他には誰もいなくて。私とシキ以外、建物も乗り物も植物も何もかも全てが真っ白で。白以外の色を持っているのは私とシキだけで。どこまで行っても、白、白、白。目がくらんでしまいそうな純白。恐怖さえ感じさせる、汚れなき色。

怖くなって私はシキを振り返った。これはどういうこと。世界に一体、何が起こったの、って問いかけるために。シキなら何か知っているような気がしたのだ。

そしたらシキはふんわりと微笑んだ。私の瞳に恐怖の色を見てとったのだろう。いつの間にか私よりも大きくなったシキは、私を安心させるかのように私の肩に両手を置いた。大丈夫。何も怖くないよ、って彼の金色の瞳は言っていた。金色のなかに小さな私が映っていた。

そこで私は目が覚めた。

目が覚めて暫くは、一体自分がどこにいるのか分からなかった。真っ白な天井が目飛び込んできて、自分はまだ白の世界に囚われたままなのかと恐怖を覚えた。嫌な汗をかいていた。

横になったまま慌てて右を向くと、茶色い窓枠とクリームイエロー地のカーテンが目映った。それを見て、私はほっと胸を撫で下ろした。

よかった。まだ白以外の色は存在していた。滅んでなかった。世界はまだ正常だ。

心臓がまるで喉もとまでせりあがってきたみたいにいるさかった。

そこまで考えて、そういえばあの白の世界はただの夢だったのだと漸く思い出した。

何を本気で焦っていたのだろう。恐怖を感じていたのだろう。

馬鹿みたいだ。

ただの夢なんだから。

私は苦笑しながら上半身を起こした。まるで自分も身体の一部だと主張するかのように、汗で寝間着が身体にべったり張り付いていて、気持ち悪かった。シャワーを浴びたい。この汗を、何故か胸に巣食う嫌な気持ちと一緒にきれいさっぱり洗い流してしまいたい。

なるべく音を立てないように、そろりそろりとベッドから這い出た。隣ですやすやすと穏やかに眠る彼を起こさないように。

床に足を下ろした。足裏に伝わるひんやりとした感触がほてった身体に心地好い。身体を冷ますまではいなくても、少し落ち着いた。

立ち上がって伸びをした。横目で小さく寝息をたてている彼を見ながら。薄紅色の鱗がカーテンの隙間から侵入してきた朝の日差しを浴びてきらきらと輝いていた。

時折尖った翼がぴくぴくと思い出したように動いている。しなやかな身体が今は見事に丸まっている。長い尾を抱きこむようにして、彼は目を閉じていた。気がついたら微笑んでいた。いつの間にか嫌な気持ちはすっかり消え去っていた。

私はシキと二人で暮らしている。両親はいない。ずっと一人ぼっちだった私の元に、ある日突然シキがやってきた。周りの人々は、一人と一匹だと言うけど、私は断固として二人だと主張している。

シキは薄紅色の綺麗な鱗をその身にまとった美しい小さなドラゴンだ。

金色の瞳は零れ落ちそうなほど大きく、真紅の翼はまるでルビーを伸ばして平らにしたかのよう。長い尻尾は彼の感情を正確に表し、しなやかな身体は猫のようだ。測ったことはないが、体長は約五十センチといったところか。抱いてみると意外にずっしりと重い。

髪が濡れたまま浴室から出ると、シキが起きていた。ベッドの上で大きく伸びをしている。おはようと声をかけたらにっこり笑った。金色の瞳が細められている。

「お腹すいた？ ご飯食べる？」

そう尋ねると、くうと鳴いた。肯定のトーンだった。私はシキの食事を用意するため机の引き出しのなかを開ける。

中には色鉛筆やらインクやら絵の具やらが所狭しと入っていた。

いくつかインクや絵の具を取り出してシキのところに持っていく。

これがシキの食事。シキは私の手の中のものを見て嬉しそうに舌鼓を打った。

シキは色を食べるドラゴン、ランスパランだ。

彼は寒色系よりも暖色系の色が好みようで、特に赤やオレンジといった色を好んで食べる。

シキによって色を失った物体は「無色」になる。白ではない。本当に色がなくなるのだ。今シキが食べている暖色系のインクや絵の具も、どんどん色を吸い取られて無色になっていつている。その様子を見るのはなんだか面白い。

だから私は自分の食事なんかはそっちのけで、おいしそうに色を食べているシキを毎回眺めている。シキは見られているからといって恥ずかしがる様子も見せず、食事に没頭している。あっという間に渡したものの全てが無色になった。

シキの食事の後片付けをして、私は漸く自分の食事の準備をする。

昨夜の残り物やパンなんかを食卓に出して、テレビをつける。見慣れた女性キャスターが化粧と共に笑顔を顔に塗りたくっていた。最近起きた火災や殺人事件、強盗なんかのニュースを男性キャスターが真顔で読み上げていく。

世界は平和になったはずなのに、平和じゃないんだなと私は他人事のようにそれらの事件を耳から耳へと流していく。もともと軽い食事を終え、食器を流しに持って行って洗い物。

テレビから離れた上に水を流す音なんかで、テレビの声が耳に届かなくなった。

それでも特に私は気にしない。

どうせ私にとっては他人事なのだ。

自分は恐ろしい事件なんかに絶対に巻き込まれないと信じきっているおめでたい人間なのだ。

自分でも分かっている。

でもどうしても嫌な事件に巻き込まれる自分を想像できないし、したくもない。

ニュースで流れる数多くの恐ろしい事件にいちいち親身になって共感したり悲しんだりしていたら、身体がいくつあっても「もたない」と思う。

ニュースをただの物語のように耳から耳へと流すのは、私の一種の防衛反応なのだ。

結局人は自分が一番大事。

見知らぬ他人が事件に巻き込まれようが事件を起そうが、自分の生活がその影響を受けることになんかなってはならないのだ。

薄情かもしれないけれど、それが事実だと私は思っている、「あの事件、怖いね」と表面上は言いながらも、心の底ではでも自分は関係ないと思っている人は世間に大勢いるのだ。

そんなことを考えながら蛇口をひねって水を止め、洗い物を終わると、丁度キャスターが次の事件に話題を移したところだった。

『さて、次のニュースです。先日、首都トキヨの郊外で『白色地帯』が突然発生しました。付近の住民によりますと、一夜にして突然、何もかもが白くなってしまった模様です。建物から植物から全てが真っ白で、その地区に住む住民は忽然と姿を消してしまったようです。現在警察が総力を挙げて調査にあたっていますが、詳しいことはまだ何も分かっていません。情報が入り次第、詳しく……』

ぼろりと手に持っていたタオルを取り落とした。シキが足元にやってきて不思議そうに私を見上げているのが分かる。だが、今はそれどころじゃなかった。

私は更なる情報を求めてテレビ画面を食い入るように見つめたが、キャスターは無常にもさっさと次の話題に移ってしまった。ザッピングして、別の番組でも今の話題を扱っていないか調べてみる。どの番組でも丁度扱い終わったところなのか、それとも情報が入ってきていないのか、今の『白色地帯』とやらのことを問題にしている番組はなかった。

仕方なくテレビを消してリモコンをベッドの上に放り投げる。

シキが喜んで長い尾を振りながらベッドへとダイブし、リモコンで遊び始めた。それを軽くたしなめながら私は仕事に行く準備をする。気づけばもう時間は残されていなかった。

慌てていまだに濡れている髪を乾かし、服を着替えて鏡の前で化粧をして、仕事に持っていく鞆に必要なものを詰めていく。その間もさっきのニュースのことが頭から離れない。

まさか今朝方見た非現実的な夢の内容と同じだなんて、そんなこと、ありうるのだろうか？

分からなかった。

が、とにかく今は仕事に行かなくてはならない。私は無理矢理『白色地帯』のことを頭から振り払って、シキにいただきますを言って家を出た。

仕事場でも『白色地帯』のことは話題になっているかと思いきや、そうではなかった。

仕事仲間たちは皆別の事件や事故のことばかり話題に上げて、『白色地帯』のことは完全に無視していた。

どうしてだろう。

仕事仲間たちが話題にしている事件なんかより、『白色地帯』の方がよっぽど身近なところで起こっている出来事なのに。同じ首都トキヨに在住していて、トキヨの郊外で起こった不可思議な事件のことはどうでもよいのだろうか。帰りの電車で揺られながら、そんなことをずっと悶々と考えていた。

そうだ。一度そのトキヨの郊外とやらに行ってみようか。実際に目に見てみたら何か分かるかもしれない。そうだ、そうしよう。

ぼんやりと車内を見回してみると、ランスパランを膝に乗せた女性がいた。シキとは違って、深青色の鱗が夕日の光に照らされている。女性は大人しいランスパランの喉元を優しく撫でてやっていた。温かい夕日の光に包まれた二人は、私の胸をどこか温かくした。ポールに背を預けながら、再び窓の方を向いた。窓に映った疲れた私の顔が、微笑みかけてくれた。

帰るといつものようにシキが私を迎えてくれる。尻尾をちぎれんばかりにぶんぶん振って、綺麗な薄い翼をぱたぱたとためかせて、喜びを全身で表してくれる。それを見るといつも私の心は温くなる。疲れは一気に吹き飛んで、ほっこり笑顔が自然に浮かぶ。

「ただいま、シキ。寂しかった？」

鞆を床に置いて抱き上げると、シキがきゅうきゅう鳴いて頬を摺り寄せてきた。温かい鱗が心地よい。シキを抱いたまま、靴を脱いで部屋に上がった。ベッドの上にそっとシキを下ろし、朝からベッドに放置していたリモコンを手に取る。テレビをつけると、丁度良いタイミングで夜のニュースが始まった。シキの食事を用意しながら耳を傾ける。またあの『白色地帯』に関しての話題があがってこないかと思ったが、期待は外れた。

仕方ないかと肩を竦めて自分の食事を用意しにかかる。今日はもう面倒なので出来合いのものを購入してきた。てんぷらを食いたい気分だったので、天井。レンジで温める。その間にお茶を用意する。

お湯を沸かしていると、テレビの映像が真っ白な世界に切り替わった。思わずお湯を放置してテレビの元に駆け寄る。音がよく聞こえなかったので、リモコンでボリュームを上げた。

『……のように、『白色地帯』は拡大している模様です。既に数万人の人間が行方不明になっており、現在警察が総力を挙げて捜索中です。一方、『白色地帯』に以前のまま生存している生き物はどうやらランスパランだけのようで、警察はランスパランと『白色地帯』の関係性を疑っております』

「ランスパラン……」

思わずシキを振り返った。シキは小首を傾げてこちらを見上げている。金色の美しい瞳が、どうしたの、と問うていた。それを見て、ふっと笑う。

まさか。

こんな何も分かっていなさそうな子たちと『白色地帯』と一体何の関係があるというのだ。関係なんかないに決まっている。疑うだけ無駄だ。私は気楽にそう考えていた。

でも、『白色地帯』のことを知った世間の人々はそうは思わなかったようだ。

数日後、警察が私の元を訪れた。ランスパランであるシキを引き取りに来たのだ。

私は抵抗することもできず、シキをよく知りもしない人間に渡すしかなかった。何も分からないシキは不安そうな色をその瞳にたたえてこちらを何度も振り返り振り返り、警察がもってきたケージに素直に入っていった。ああ、なんて大人しくて素直で良い子なんだろう。こんな子が、『白色地帯』と関係あるはずなんかないのに。どうして世間の人はこうランスパランを悪者にしたがるのだろうか。こんなに良い種族なのに。私は涙が溢れる瞳でシキを見送った。

狭い部屋だけれど、シキがいなくなると急に広くなったように感じられた。がらんとした、静かだった。机の引き出しを開けると、シキの食事がいっぱい詰まっていた。暖色系のものがぎっしり。じわり。目頭が一層熱くなってきた。

シキは何もしていないのに。この部屋で一日中大人しくしているのに。

どうして警察はシキを連れていってしまったのだろう。ちゃんと連れていってもシキにご飯を食べさせてくれるだろうか。まさかすぐ殺すようなことはすまい。シキは寒色系の色はあまり好きではないということをちゃんと伝えればよかった。寒色系のもののばかり食べさせられないといいが。

ニュースによると、たくさんのランスパランが全国から集められているようだから、せめてシキにたくさん友だちができればいい。そう思うことで、自分を慰めようとした。

今や仕事場でも『白色地帯』のことは話題に昇っていた。

どうやら『白色地帯』が広がっているのはこの国だけではなく、世界中で拡大していつているようだった。

『白色地帯』に飲み込まれた場所は全てが真っ白になる。

人間や犬や猫なんかも真っ白になるかと思いきや、植物以外の生物は消失してしまうらしいとニュースでは言っていた。

今や全国規模で『白色地帯』が発生し、拡大していつている。人々は何とか消失を免れようとしているが、非現実的で不可思議な現象の前にはその努力は空しいだけだった。

どんどん人は消失していき、どんどん『白色地帯』は拡大していく。

非力な人間たちはなす術もなく、消失を待っていることしかできない。

生き残っているのはランスパランだけ。

そうだ。それならば、ランスパランに原因があるのだと疑っても仕方ないのかもしれない。

でももし。

もしもランスパランに『白色地帯』の原因があつたとしても、シキには何の罪もないのに。シキは何もしていないのに。

またその考えに帰着する。いけない。なんと未練がましいやつなんだ、自分は。シキは警察に連れていかれたのだ。もう、会うことはないかもしれない。次に会えるとしたら、シキたちランスパランが解放されたときであるはず。

そのときは恐らく、人類がすっかり消失してしまったときであることだろう。

そのときには勿論、私も消失してしまっているのだ。

つまり、つまり、もう会えないということ。

そう考えると、怖くなってきた。こういうときにこそシキにいてほしかった。あの温かいしなやかな身体を抱きしめ、金色の瞳に恐怖の色を吸い取ってほしかった。シキがいないと落ち着かない。

怖い。怖い。怖くてたまらない。

死にたくない。いや、死ぬのと消失するのとはまた別なのかもしれない。消失したと思っているのはこの世界に残された人間たちだけで、もしかしたら消失したと思われている人間たちはどこか別の世界に飛ばされただけなのかもしれない。そんな非現実的なことを考えてみる。これは、逃げだと分かっていた。

私はただ、恐ろしい現実から目を背けたいだけなのだ。

シキが警察に連れ去られてから、『白色地帯』の拡大は更に加速したように私には思われた。

ある日仕事場に行くと、そこは全てが真っ白になっていた。

思わず呆然として暫くその場に突っ立っていた。

灰色だった机も、緑だった観葉植物も、青かった床も、全てが真っ白になっていた。

誰もいなかった。

私は仕事場から転がり出た。

思わず口を押さえた。

走った。とにかく走った。

駅まで走ってわき目もふらず駅のトイレに駆け込んで、個室のドアを閉めた途端、吐いた。全てを出しても、身体のなかの気持ち悪さは全然なくならなかった。

思わず自分を抱きしめた。身体が震えていた。

家に帰ってテレビをつけると、もう番組は放送されていなかった。どのチャンネルをつけてもザーツと耳障りな音が流れるだけで、見られるものは何もなかった。暫くリモコンをいじっていたけれど、無駄だと分かると私はテレビを消してお風呂に入りもせずにベッドに横になった。

ここが『白色地帯』に飲み込まれる日はいつなのだろうとぼんやり考えながら、先ほどまで恐怖を感じていたというのに何故か私は眠りに落ちていった。

そこは、真っ白な世界だった。

真っ白な世界で、私とシキの二人だけがいた。

他には誰もいなくて。私とシキ以外、建物も乗り物も植物も何もかも全てが真っ白で。白以外の色を持っているのは私とシキだけで。どこまで行っても、白、白、白。目がくらんでしまいそうな純白。恐怖さえ感じさせる、汚れなき色。

怖くなって、振り返った。そしたらそこには、いつの間にか私よりも大きく成長したシキがいた。薄紅色の鱗が、真っ白な世界で一際輝いていた。白しかないというのに、シキはどこか嬉しそうだった。

良かった、とシキの黄金の瞳が言った。君を守れて、良かった。

良くない、と私は答える。思ったよりも悲痛な色が含まれた声だった。自分でも驚いたが、夢のなかの私は続けて言葉をはいていた。

みんな、みんないなくなっちゃった。

人間は私一人。

他には誰もいない。

どうしたらいいの。

怖くて寂しくてたまらない。

どうしたらいいっていうの。

僕がいるよとシキの目が再び言う。

大丈夫、君は独りじゃない。僕がいるよ。

僕がずっと傍にいる。

それは嬉しいけれど、と私は答える。頬を生暖かい何かが伝っていた。流れるそれをそのままに、私はシキに訴える。

でも私は人間なの。社会性を持つ人間なの。人間の集団のなかでしか、平穏に生きられないのよ。

すると、シキがきょとんと首を傾げる。心底、不思議そうな表情で。

何を言っているの？

君はもう、人間じゃないよ。

穏やかなゴールドが微笑んだ。優しく、柔らかく。

そこではっと目が覚めた。

また、あの夢。『白色地帯』の夢。最近この夢しか見ていない。台詞は毎回毎回違うけれど、シチュエーションは大体同じ。真っ白な世界で私とシキの二人だけ。他には誰もいない世界。寂しい世界。怖い世界。

上半身を起して呆然と前を見やる。不安になって視線を落とすと、私の腕はちゃんと人間の腕をしていた。安堵のため息が漏れた。

ただの夢として片付けてしまうには、あまりにもリアルだったし何度も見すぎていた。また嫌な汗をびっしょりかいている。私は嘆息してベッドから這い出た。

そのとき、こつこつと音がした。音がした方向を見やるとそこにはドアが。訝しく思ってその場に固まったままドアをじっと見つめていると、またこつこつと音がする。

何度も何度も、一定の間隔をあけて音は繰り返された。

不思議と恐怖は感じなかった。予感があったからかもしれない。ドアの方へと歩み寄り、鍵を外す。そしてドアを押し開けた。

予想通り、そこにはシキがいた。前よりもずっと大きくなって。私を見下ろしていた。大きくなってはいたけれど、シキはシキだった。

私には分かった。シキは何も変わっていない。中身は以前のままのシキなんだって。

黄金の瞳は私の姿を映してきらきらと明るく輝いていた。私は笑顔で彼に応え、大きくなって帰ってきた彼を抱きしめる。温かい鱗が心地よい。どくんどくと心臓の音が聴こえる。彼は確かに生きていた。

「お帰り、シキ」

シキがくうんと明るく鳴いた。シキを抱きしめながら、私はちゃんと認識していた。いつの間にか、外が明るくなっていることを。

様々な色を持っていたはずの世界が、たった一色になっていることを。

私はシキを抱きしめる力を強くした。大きくなったシキが、ぎゅっと抱きしめ返してくれた。その力が私をこの世に留めておいてくれることを、本能的に悟っていた。

今、ここで彼の腕から逃れたら。私は他の人と同じような運命を辿ることになるのだろう。

今、ここで彼の腕におさまっていたら。私は他の人とは違う道を歩むことになるのだろう。

彼は私を離すつもりはないようだった。私を力強く、それでいて優しく抱きしめてくれるその力は、私を守るためだけに存在していた。彼は私を守るために戻ってきてくれたのだと分かっていた。

開いたドアから白が私の部屋のなかにまで侵入していく。全てが白く染め上げられるまでにそう時間はかからなかった。

あっという間の出来事だった。

そして全世界のありとあらゆるものが真っ白になった。

私とランスパランたちを除いて。

TNE END